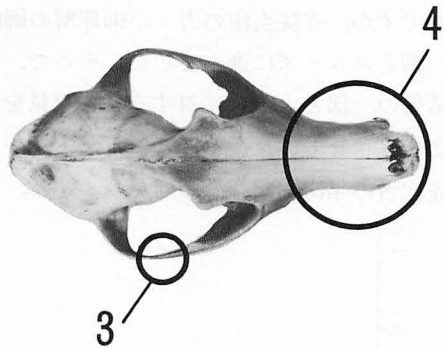
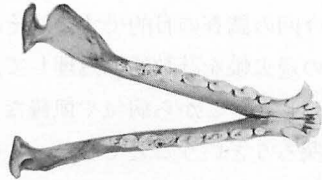
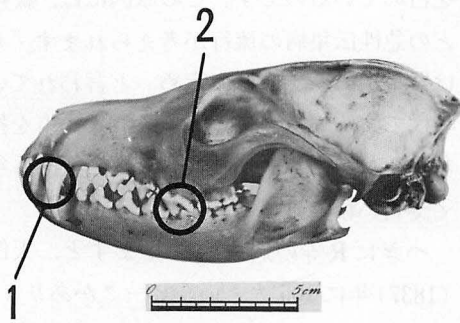


はくさん

第6巻 第2号



ホンドギツネ (食肉目 イヌ科) 歯式 = $\frac{3 \cdot 1 \cdot 4 \cdot 2}{3 \cdot 1 \cdot 4 \cdot 3}$

口を閉じたとき、下あごの下縁にまで達するほど長くのびた犬歯(牙)をもっているのが最大の特徴である(①)。上あごの第四小臼歯と下あごの第一大臼歯がよく発達して裂肉歯を形成している(②)。また、下あごを動かす筋肉(絞筋)が著しく発達しており、このため頬骨弓が非常に広がっている(③)。これらの特徴は、肉食に最も適応した哺乳類であることを物語っている。事実、白山地域でもノウサギとネズミ類が最も普通の餌となっている。オオカミが絶滅した現在の日本では、少なくとも形態上からは、肉食哺乳類の王者といえる動物である。そういえば、細く長い吻(④)のせいで、なかなか威厳のある顔つきをしているのも見逃せない特徴のひとつである。(上あごの長さ：15cm、幅：7.8cm、高さ：5cm。オス成獣)

(花井 正光)

白峰村白峰集落の過去帳について

佐々木 清 光

4月の末に千葉徳爾先生から突然金沢行き
の切符を渡され、3日後に出発するからと調
査の同行を求められました。断われない状況
設定をして命令するとは人権蹂躪も甚だしい
とフンガイしましたが、結局は行かざるを得
ませんでした。そんな事情ですから、私には
調査地白峰村に関する知識は全くなかったの
です。しかし、行ってみて大変な山奥で、き
びしい自然があったろうことはすぐによみと
れました。

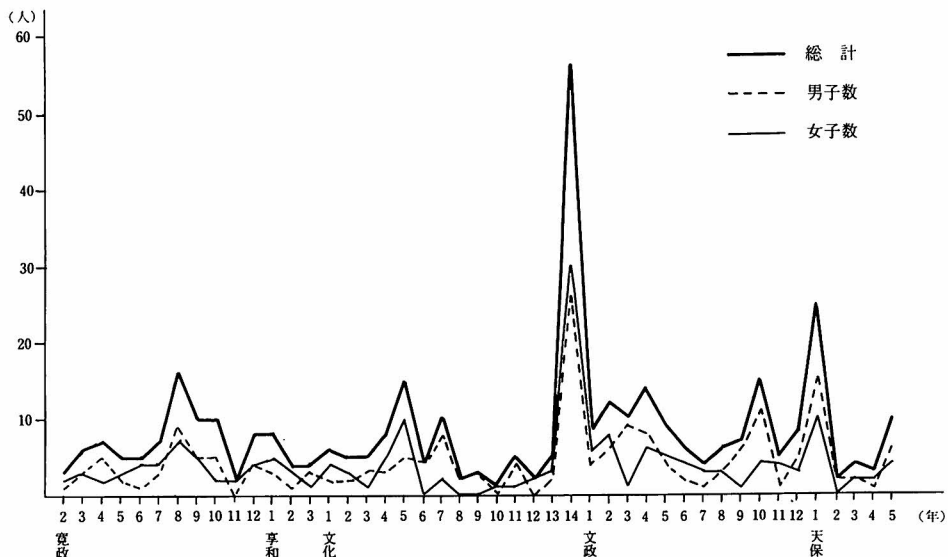
さて、今回の調査の目的ですが、それは各
寺院所蔵の過去帳を計数的に処理して、時系
列的に配列し、そこから病気や飢饉などの死
亡原因を探ろうということでした。この土地
は真宗寺院のみで多少面道であろうと予期し
たのですが、寺院当住の方々の御理解の御蔭
で、割とスムーズに進みました。そこで、そ
の結果の一部と、それに対する私の管見をこ
こに発表させていただくことにします。

死亡者の年次的な増減傾向をみますと、グ

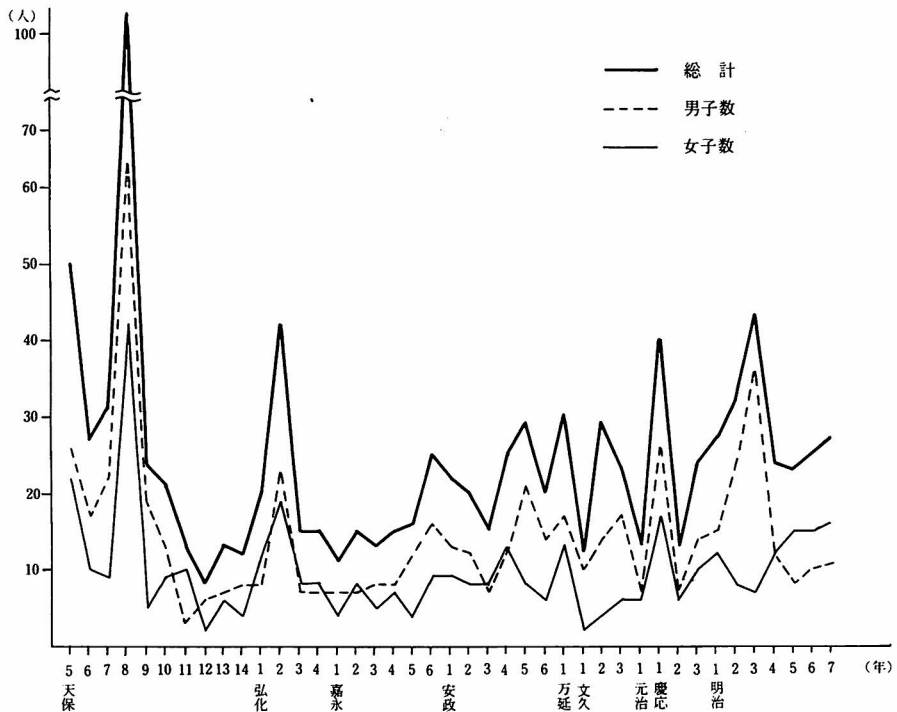
ラフのように明治以降より近世（江戸時代）
の方が、遙かに激しい変化を示している事が
解ります。この結果はどの寺院についても同
様で、近世におけるこの地方の住民生活が、
きびしい条件下におかれた不安定なもので
あったことを偲ばせます。以下、例を示して
話を進めることにしましょう。

G寺の過去帳では(第1図),文化14(1817)
年に死亡者のピークがあります。そして、そ
の内の過半数が11月に集中しており、しか
も、戒名からみると、若年層がそのほとんど
を占めているのです。この原因には、麻疹な
どの急性伝染病の流行が考えられます。「疱瘡
は器量定め、麻疹は命定め」と言われていた
時代ですから、当時の医学ではなす術を持た
なかったのでしょう。残念ながら天保5年ま
でで古い帳簿は終わっています。

つぎにR寺の過去帳を見ますと、天保8
(1837)年に105人というピークがあります。
天保5(1834)年から明治7(1874)年まで



第1図 死亡者累年比較(1) [白峰村G寺過去帳より作成]



第2図 死亡者累年比較(2) [白峰村R寺過去帳より作成]

他のピークが、すべて50人以下なので、いかにも多くの人がこの年に亡くなっているかが解ります。これが江戸時代3大飢饉の1つとして名高い天保大飢饉の結果なのです。当時の住民生活が、飢饉に対処し得るほどの余裕を持たなかったという現実が、この結果から窺えましょう。ことに、他地方たとえば飛騨や関東各地の飢饉による死亡が、不作の翌年である天保9(1838)年に多くなるのに、白峰では不作の年の秋に早くも増大するのは、出作物の夏作の収穫が乏しく、前年冬以来の食物の不足が補なわれず、そのまま飢えてしまったという焼畑地帯の特性をよく示していると考えます。

さて、R寺の過去帳グラフ(第2図)を見てもう1つ気をつくのは、明治3(1870)年のピークが専ら男子死亡によるもので、女子は却って減少しているという事です。あるいは偶然かも知れませんが、何のためこうなったのか理由はよく解りません。

最後に、過去帳の記載のしかたについて気

づいた点を述べましょう。G寺の過去帳などを見ますと、戸主以外の死亡者の名前には不明なものが多く、誰々の「ぢぢ」「ばば」「のの」「いね」というような記載の仕方が多いのが目に付きます。これは出作りのため他の村人との接解の機会が限られており、勢いお互いの名前を使用する機会が少なかったためではないでしょうか。何しろ名前を知らなくとも、誰々の「ばば」で話は十分通じる限られた社会だったので、強いて名前を知る必要もなかったのでしょう。ことに女性には同じ名が多かったようです。だから、甚だしいのになると家族の名前も知らない人さえいたという話もあるくらいです。そう言えば、この村の過去帳には、やたらと享年不明の人が多くのが目につきました。その理由も案外こんな所にあるのかも知れません。それはともかく、昔の山中生活においては天寿を全うするのは、なかなか至難の業だったのです。

〈筑波大学学生〉

白山麓出作り小屋の民具収納空間について

小林 忠雄

白山麓の白峰・尾口村では昭和30年代まで出作りによる農耕を中心とした生活が数多く営まれてきた。この生活形態は我が国の山地経営の原初的あるいは基本的な生活パターンを表示するものとして注目されるものである。

此の春、石川県立郷土資料館と白峰村は過去数年間にわたり収集した出作り小屋の生活民具1,475点と出作り小屋の原初的形態とみられる根葺き形式の民家一棟の国指定重要有形民俗文化財を受けた。その折、これら資料の調査を通じて筆者は特に民具の収納空間について留意してきたので、ここにその要約をまとめたいと思う。

山村の暮しできわめて特徴的なのは平野村に比して実に多種多様の道具を所持していることである。特に自製民具の量と種類が多く、それは出作り地の生活においてより顕著にみられるであろう。その理由として次の要因が考えられる。

- (イ) 出作り生活の基本は自給自足である。
- (ロ) 出作り地の自然環境では長年の自然観察の結果豊富な材料が得られ、しかもその材質の特徴を熟知し種々な創意工夫が捻出される。
- (ハ) 隣家とは隔絶した単独の生活形態をとることから比較的生活の行動が機能分化する傾向をもち、従って道具も機能分化が著しく進む。

- (ニ) 山路も悪い山地では物質の流通も悪く、また生業の現金収入も少いことから購買力が貧弱である。故に自製に頼らざるを得ない。
- (ホ) 冬季間は深い雪の中に閉じ込められ、この間に多量の手仕事製品を自製、冬の直前までに材料を大量に準備する。

その他いろいろな理由があげられるであろうが、このようなところから出作り生活ではその孤立性故に諸道具の最少限に必要な数量が決められるのではなからうか。このことは出作り初期の小屋の規模などから家族が居住し、生業を営むに足る不可欠の諸道具の収納空間が求められたと推察される。

ちなみに指定を受けた根葺き小屋尾田敏春



白峰村大道谷忠キ山尾田家（移築前）

家の事例について、橘礼吉氏の詳細な研究報告があるので関連の記述を引用すれば、(要約)「文久2年頃の建築とみられる尾田家はその初代忠次郎が自ら建築材料を調達している

が、太さ長さ共に一段落ちる材料でナバイ小屋を建てたのであり、一本の柱として真四角で根本も先も同じ太さでしかも真っすぐなものは見当らない。「分家出作りはムツシの諸山や生活必需品の充足等にそれなりの出費があり精一杯であったのではないか。したがって普通の出作り小屋・アシアゲにする経済的余裕がなく天地根元的なネブキ小屋を余儀なくさせられたものであろう」(橘礼吉「白山麓出作り住居の原型ネブキ小屋について」加能民俗研究3所収)と述べている。

すなわち原初的な出作り小屋の形態は根葦きの形式のみならず、その経済的条件によりその居住空間を最小限にとどめることを目的として構築されている。従ってある限定された出作り小屋の居住空間と諸道具との関係が極めて密接な関係にあり、一定のルールを生み出しているのではなかろうかと考えるものである。

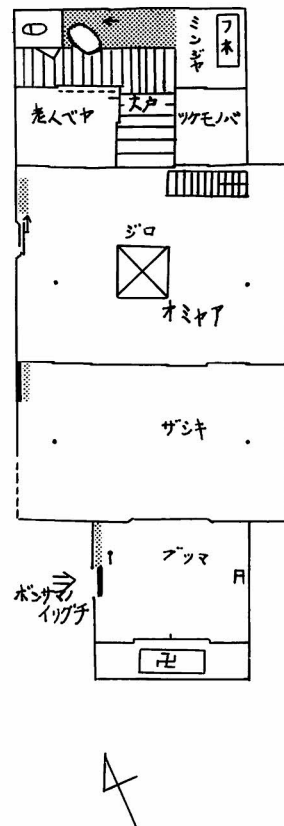
出作り小屋の生活用具として集められた1,475点の民具は、一棟の出作り家が往時生活に不可欠であったものを主に分類整理されたものであり、一応の生活の復元と完結を旨としたものといえる。これら資料の分類・種類数、数量は表一1のようになっている。表

表一1 出作り小屋の生活用具分類

分類	種類数	点数
I 雑炊農耕用具	65	300
II 養蚕関係用具	37	122
III 手仕事関係用具	42	132
IV 運搬通信交易用具	36	141
V 衣生活用具	62	267
VI 食生活用具	92	305
VII 住生活用具	58	151
VIII 信仰儀礼用具	29	57
計	421	1,475

のように種類としては421種あげられるが、実際には道具の大小、材質の違い、家族の人数、男女別、予備の分、用途の違い等によって一棟の出作り小屋では平均して約2倍の800点を所持していると思われる。次にこの表から示されるように生業の中心である雑炊農耕用具の65種300点と食生活用具の92種305点が最も多く、これらが民具の主要なものであり出作り生活の基本をなしていると思われる。

これらの民具は統て合掌造りの母屋を中心としたコヤバのなかにイタグラ、コゴヤ、カタリゴヤ、センジャ(便所)等の付属小屋に収納されるのであるが、例えば稗粟の乾燥用



尾田家母屋の間取り(「白山麓」1973より)

具アマボシなどの大型民具はどの出作り小屋にあるものでもなく、出作り地での居住年数、規模の拡大等によって後に加えられたものであり、その収納は付属小屋の設置や母屋の建て替え、改築によって可能となった。即ち常時使う道具と一時期に限り使う道具とは収納場所も異り、特に非日常的な道具の数量が増加することは、出作り小屋の収納能力を圧迫することになるのである。入母屋型合掌造りの母屋では家族の日常生活の空間は1階に、2階以上の屋根裏は道具の収納空間であり、養蚕の蚕飼い場として使われている。従って大型の小屋は屋根裏も大きく4階までとることができるが多くは3階までであった。

民具の収納状況の調査によって次のような特徴をみる事ができた。

- (イ) 生業に関する用具で常時使用するもの多くは玄関におかれ、壁のコシイタや柱に掛けたり吊したりする。カマなどは藁製のカマサンに突きさしておく。
- (ロ) ガンド、ヨキ、オガ、ナタなどの鉄製切れ物は刃の錆を注意し風通しのよい乾燥した場所を選び、例えば2階から風が吹く階段下などが多い。
- (ハ) 脱穀調整関係の用具は年に一度の使用のため、コゴヤ、イタグラ、ナヤに収納される。
- (ニ) 養蚕具は春、夏2回の蚕飼を屋根裏の2階で行い終了後は折りたたんで隅に一括しておかれる。
- (ホ) 年中使用の運搬具は玄関に、冬季のソリなどは乾燥を要するので2階に収納され、藁製のテゴやドウラン等も腐り易いので2階の風通しの良い場所におかれる。
- (ヘ) 特にミノやユキワラジなど湿気を含む用具のほとんどが、屋根裏のジロの温気が屈

く場所に吊される例が多い。

- (ト) 食関係のコネバチ、オオカマ等使用頻度の少ないものは2階以上の屋根裏の隅かイタグラに収納され、日常的なものはミンジャ(台所)の棚かオミヤー(居間)のフロ棚に収納されている。
- (チ) 膳碗類もお仏事などのハレの日の物はイタグラか屋根裏にイレバコに入れて大切に保管され、日常のものはフロ棚に収納される。
- (リ) 金銭や財産に関する貴重な書類を入れるテバコ、コダンス、あるいは銃、刀剣などはネマ(寝間)におかれる。また女性の物の化粧具、裁縫具、寝具、タンスもネマにおく。
- (ス) 信仰関係はヤマノ仏壇近くにまとめて置かれ、講の什器類はイタグラに保管された。



出作り小屋内部民具収納状態

以上は概略であるが、次に個々の事例のなかで特別の収納方法をとるものについて数例示してみる。

- (イ) 長い柄のついたカマザオは刃先を柄からはずしてイタグラに収納する。稗粟の穂を蒔るホトリガマは杉箱に入れて保管する。
- (ロ) 焼畑に使うイブリはギヤ(下屋)の縁の下におく。また脱穀用のマメウチバイは合

掌の棟木と茅の間にはさんでおく。

- (イ) タネイレは鼠を防ぐのと乾燥のため2階から吊しておき、タナモノタンスなども乾燥のためオミヤーのジロ近くにおかれた。
- (ロ) ヒウチイシはジロ側のコモノイレに入れ、毒虫を追うカビは3階などに積んでおく。
- (ハ) 養蚕の稚蚕を選別するハキタテガミは湿らぬよう杉箱に入れイタグラに収納し、同じく羽毛は仏壇の引き出しに保管された。またクワキリバンなどは2階の特にゴミのつかない場所を選んで置かれた。
- (ニ) 手仕事のアマダイやカタは屋根裏の梁に結んで吊した。
- (ホ) ニナイボウは便所の棚におく。
- (ヘ) シン追いなどに使われたホラガイは家の中心の大黒柱に掛けられた。
- (ニ) ニガリを受けるためのシオバチはミンジャの隅におかれ、貯蔵用のミソオケはイタグラにおかれる。
- (ヌ) 稗飯の炊飯用具ゴロギヤはナベジャ（ジロの主婦の坐る場所）に最も近いフロ棚に収納される。
- (ル) キカギは物を吊る用具だが、高い位置に吊した場合は日常的に使わないものを、低

くは日常使用のものをそれぞれ掛けておく。

- (オ) 仏飯用米飯を炊く専用のオプクサマナベとカンギボウは、ミンジャの高い位置におかれたり掛けられた。
- 以上が収納状況の特に注意をひいた事例であるが、これらは必ずしも原則的な方法ではない。

上記の特徴から出作り小屋の民具収納空間は次のような点で区別されている。

- (イ) 用具の大きさ数量による区別
- (ロ) 鉄、木、竹、藁など材質による区別（乾燥を要する物）
- (ハ) 使用頻度による区別（使用現場との関係において最も近い場所が選ばれる）
- (ニ) 収納方法の違い（置く、吊る、掛ける、伏せる、たてかける、はさむ、突き刺す、イレバコにしまっておくなど）による区別
- (ホ) 日常使用の物とハレの日の物の区別

古来から続けられた出作り地の居住空間を民具収納空間からながめた場合、合掌造りの民家形式は屋根裏という大きな収納空間をもつところから単独の生活形態には最も適したものであるといえよう。

〈石川県立郷土資料館 学芸員〉

当センター駐車場整備について

当センター利用者の駐車場は未整備のため、大変御迷惑をかけております。今年度駐車場整備事業として9月初め、工事に着工し、10月末日に完成する予定です。工事期間中はセンター構内において出来るだけ駐車できるよう努力しておりますのでぜひ御利用ください。

<蛇谷の地質解説>

2. 蛇谷を構成する岩石

——溶結凝灰岩と火山角礫岩——

東野外志男*・山崎 正男**・竹中 修平**

蛇谷を構成する火山岩類

前回は蛇谷地域に分布する火山岩類を白山火山の基盤の一員としてながめました。今回は火山岩類の性質をすこし詳しく見てみようと思います。

白山林道の高所、第1ヘアピンから第2ヘアピンにかけての林道から蛇谷越しに対岸の岩壁を眺めると、固さや色が異なる岩石が層状をなし、わずかに傾いて露出しているのが見られます(写真2-1)。第1ヘアピンのふくべの大滝では、均質に見える岩層や大小の岩塊を含む岩層などが重なりあって滝の壁をつくっています。このように、この地域の火山岩類はいろいろな火山噴出物が積み重なって厚い層をなしたもので、全体の厚さはこの林道でみられる範囲のもので1000 m以上にも達します。



写真2-1 層状をなす溶結凝灰岩層

これらの岩石は、次の2種類に大別されます。1つは溶結凝灰岩で、蛇谷を構成する岩石の大部分を占めます。他は火山角礫岩で、溶結凝灰岩層の中に何層も挟まれています。

溶結凝灰岩

溶結凝灰岩はこの名が示すとおり火山灰が集まってできた岩石—凝灰岩—の一種ですが、火山灰がまだ熱いうちに堆積したため、灰の粒が変形し、互いに溶着して一体となっている(溶結作用)ので、溶結という語が頭についているのです。溶結の程度にはいろいろあり、強く溶結したものは固くなり、一見溶岩のような外観を示すことがあります。

昨年(昭和52年)夏、北海道の有珠山が大噴火を起こし、多量の火山灰が麓の村々に降り積もったことは我々の記憶に新たです。しかし、このような噴火では溶結凝灰岩はできません。それは火山灰が地上に降り積もるまでに、空中で冷えてしまうからです。溶結凝灰岩を作る噴火は、火山灰がもっと別な形で噴出し堆積したものです。それは火砕流という形の噴火様式で、火口から噴出した高温の火山灰とガスがまじりあい一団となり、ナダレのように速い速度で地表を流れてゆくものです(図2-1)。その速さは速いもので時速100km程にも達し、小さい規模のものは谷にそって流れますが、大規模なものになれば、

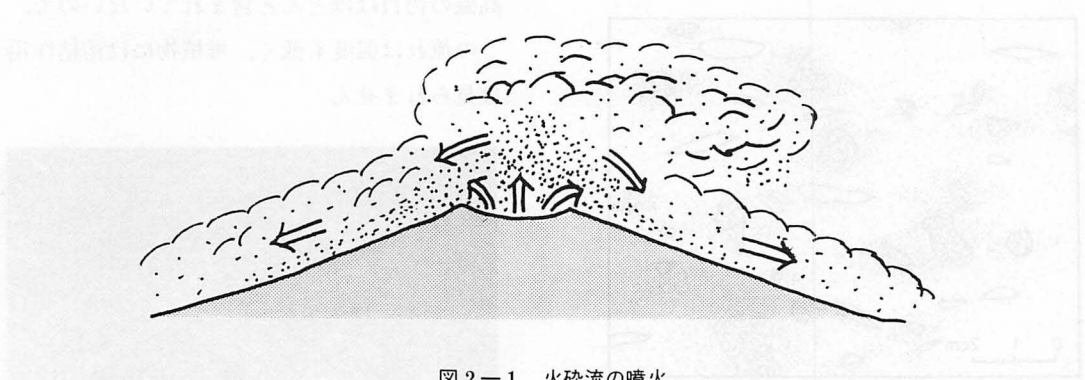


図 2-1 火砕流の噴火

小さな山などを乗り越えて、広い範囲を厚い火山灰でおおってしまいます。1回の噴火で、ときには数十mの厚さの火山灰がたまることもあります。高温のガスと一団となっていることと、地上に堆積するまでの時間が短いことのため、火山灰は十分に冷えておらず、堆積物の内部は高温を保ち、同時に上からの重みでつぶされて溶結凝灰岩が作られるわけです。この冷え固まってゆく過程で、堆積物に収縮が生じ、溶岩などによく見られるのと同じ柱状節理ができることがあります。このような柱状節理は蛇谷橋付近(写真2-2)をはじめ、林道沿いでは処々に見られます。

溶結凝灰岩といってもさまざまな見かけのものがあり、はじめて見る人にはなかなか見わけにくいものがあります。蛇谷地域の代表的なものの見かけについて、説明したいと思います(図2-2)。1つは姥ヶ滝付近の林道で見られるもので、ハンマーで割ってその新鮮な面を見ると、白い素地の中に色々な岩石の角ばった岩片がちらばっているのがまず目につきます。これらは片麻岩、花崗岩、泥岩、チャートなどで、噴火の時に地下のマグマの通路の壁をつくっていたものが砕かれて、いっしょに噴出し堆積したものです。白い素



写真 2-2 溶結凝灰岩の柱状節理 (蛇谷橋付近)

地の部分は主に溶結した火山灰であり、火山ガラス片や結晶片の細片からできています。よくみてもみると、淡緑色のうすい凸レンズ状の碎片がほぼ同じ方向を向いてはいっているのにも気が付きます。これは噴出の時、多孔質の軽石であったものが溶結の際に押しつぶされ緻密になり、レンズのような形になったものです。

もっと強い程度に溶結したものは、これの上部、つまり、第1へアビンと第2へアビン

白山地域土地利用調査について

I はじめに

私たち白山自然保護センターでは、白山国立公園を中心とした白山地域一帯の自然保護管理をその仕事の中心においています。その仕事の過程で長期的視野をもたない目先だけの利益を追求するような無謀な開発を、とかく地域振興の名のもとに推進してきた実例を数多く目のあたりにしてきました。そこでこのような自然破壊を伴なういろいろな開発事業をできるだけ押さえて、本当に地域住民の利益となるような地域の開発はどうあるべきか、自然保護行政の立場から考えてみようということで、今年度より白山地域の土地利用調査事業を実施しています。これは白山を中心とした白山麓を一つの地域とみなし、ここを舞台に、今後、最も適切な利用のあり方を白山麓一町五か村の行政担当者や学識経験者の意見を踏まえながら、築きあげていこうとするものです。従来は、自然保護と開発は対立するものという認識が一般的でしたが、ここでは、保護と開発は土地利用の現われ方の違いであり、土地の有効利用という共通の地盤にたつものという前提のもとに、真に地域住民の利益となる効果的な土地利用を推進しようとするものです。事業の進め方に当って3段階を考えています。

その1は、土地利用の現況を把握し、入り組んだ利用状況等を確認します。その2は、1の土地利用の仕方が、地域にとって望ましいものか、否かを検討したい。その3は、地域1町5か村の、将来の土地利用計画のあり方を研究し、モデル化することを考えています。

当年度は、さしあたり第1段階について主に取り組みます。

II 土地利用基礎調査事業の概要について

この事業は、白山地域における自然保護の在り方を探るための、基礎調査として行われるものです。初年度昭和52年度は、テーマ「観光・レクリエーション」について検討しました。

尚、事業は、自治体の長等、関係行政機関、学識経験者、および関係団体の22名からなる白山地域自然保護懇話会の意見を汲みとりながら進められます。

1 昭和53年度事業について

本年度は、土地利用状況について調査します。その手順として先ず土地利用の現況を地形図に表し、10月中に懇話会に提出し意見を求めます。

会で出された意見や要望を調整しながらセンター独自の考えも加味し、次回懇話会に再提出し構想を仕上げる予定です。

2 基礎調査事業の骨子について

その1は、地域の主要産業の、農林業、観光レクリエーション等について各種調査報告書関係文献、各行政機関の業務資料等を収集し、将来計画も参考に土地利用状況を把握したい。

その2は、1による読み取り結果を地形図にマークする。これをもとに地域、地区相互間での土地利用の競合状況や妥当性を検討したい。

その3は、2の現況、コンセンサスを踏まえた上でさらに自然環境保全の視点から将来の土地利用の在り方につき、地割計画的な位置づけ案を提案していく予定です。

〈自然保護課〉

たより

9月に入りめっきり涼しくなり、ススキの穂のなびくセンター周辺では、夏の間のセミの声に代わりキリギリスやコオロギなどの虫の声が聞かれる季節になりました。

記録的な暑さの続いたことしの夏は各地へ涼を求める行楽の人出が多かったようですが、ここ白山へも多くの登山者がありました。数年前から始まりました白山のゴミ持ち帰り運動はすっかり定着し、登山道から空カンや紙くずがなくなりました。自分で出したゴミは自分で後始末をするというごくあたりまえともいえる心がけが自然を守る第1歩になるのです。

本号の表紙写真はホンドギツネです。同じ食肉目でありながら、前号の植物食のツキノワグマと肉食中心のキツネの骨のちがいを比べてみて下さい。また今回は白山麓の人口と生活空間をテーマに、白峰の寺院に残る過去帳にみられる死亡者数の変動から当時の社会事情を追った佐々木氏と、民具の収納空間から出作り小屋のつくりを考察した小林氏の原稿をとり上げました。昔の白山麓の生活の様子を少しでもうかがい知ることができたことと思います。シリーズ第2回目の蛇谷の地質解説では蛇谷の代表的な2つの火山岩についての解説です。スーパー林道へ来られたときの自然観察の参考にして下さい。そして山日記は自然保護課で今取り組んでいる業務の1つである、白山地域の土地利用についてです。これからも自然保護課の仕事についてお知らせしていきます。

今度センターの展示室内に新しく2つの装置を備えました。白山の鳥について画面と鳴き声で解説したビデオテレビと、白山の生いたちを3つの絵で解説したトライビジョンです。みなさんに楽しく学んでいただけるようこれからも展示の工夫をしていきます。

秋の自然観察会を下記の要項で行ないますのでふるってご参加下さい。

テーマ 白山に出作りの里をたずねて

日時 10月21～22日(1泊2日)

場所 白峰村大杉谷 長坂家出作り小屋周辺

目次

表紙解説 ホンドギツネ	花井 正光	1
白峰村白峰集落の過去帳について	佐々木清光	2
白山麓出作り小屋の民具収納空間について	小林 忠雄	4
蛇谷の地質解説 その2	東野外志男・山崎正男・竹中修平	8
山日記	自然保護課	11
たより		12

はくさん 第6巻 第2号

発行日 1978年9月20日

発行所 石川県白山自然保護センター
石川県吉野谷村中宮

印刷所 株式会社 橋本 確 文 堂